

世界とつながり 未来を拓く 島根グローバル人。

世界を元気にした人は、
日本も元気にできる！

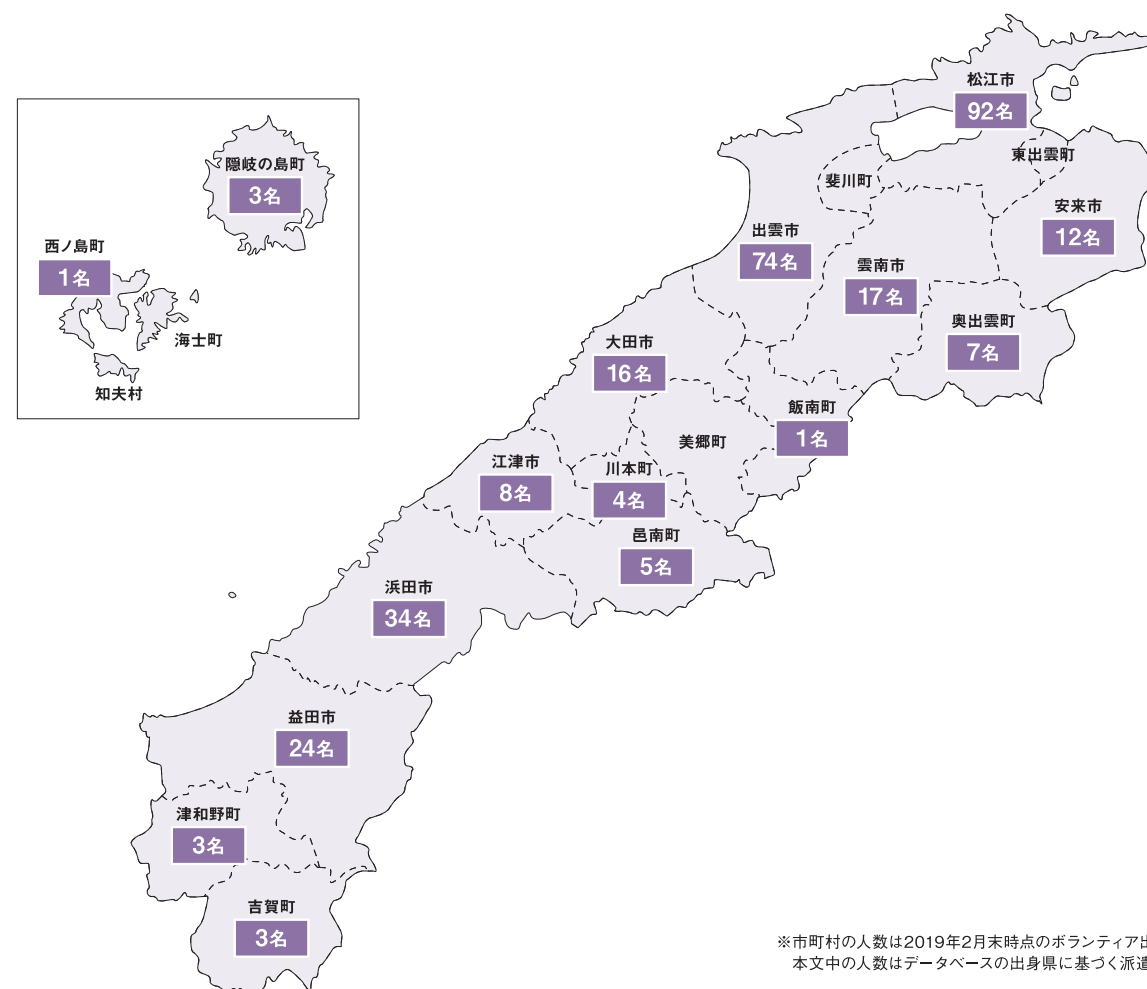


今度は地域を、もっと元気に

島根県から青年海外協力隊・日系社会青年海外協力隊に参加した人は355人を超えました。

今、島根県では、青年海外協力隊として活動後、この地域を元気にしようと、さまざまな場所でその力を発揮している人たちがいます。

《 島根県 青年海外協力隊及び日系社会青年海外協力隊派遣数 》



学校が地域を変える
地域が人を育て、未来をつくる

No.01

津和野高校魅力化コーディネーター

中村 純二さん

なか むら じゅん じ

▼派遣国



マダガスカル

▼職種

小学校教諭



海外から島へ、島から世界へ
地域の未来をつくりたい

No.02

西ノ島町役場 地域振興課
観光商工係

中上 麻里子さん

なか がみ ま り こ

▼派遣国



ペルー

▼職種

青少年活動



空間と時間の共有で心が通じる
柔軟性をもち生徒と関わりたい

No.03

邑南町立瑞穂中学校
教諭

天津 貴志さん

あま つ たか し

▼派遣国



ブルキナファソ

▼職種

村落開発普及員



患者さんに寄り添い、
心の通う信頼される助産師に

No.04

江田クリニック産婦人科
助産師

岩永 夏美さん

いわ なが なつ み

▼派遣国



グアテマラ

▼職種

助産師



地域が人を育て、未来をつくる 学校が地域を変える



No.01

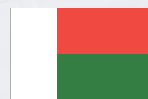
津和野高校魅力化コーディネーター

中村 純二さん

なか むら じゅん じ

石川県出身。小・中学校教員を経て、協力隊としてマダガスカルへ。帰国後、日本の教育に課題を感じ、フリーで教育イベントなどを開催。津和野町職員の要請を受けて2013年4月、島根県立津和野高等学校へ。津和野高校魅力化コーディネーターとして、総合学習の設計サポート、地域系部活動の指導、留学生の派遣・受け入れなどに携わっている。

▼派遣国



マダガスカル

▼配属先

国立教員養成校ベナサンジャチャ地域センター

▼職種

小学校教諭

▼活動内容

日本の教育システムや授業アイデアを紹介しながら、現地に合った制度、授業プログラム、研修の仕組みを提案する。

▼派遣期間

2009年9月～2011年9月

統廃合の危機を救ってほしい

開校100年を超える歴史ある津和野高等学校。生徒数約200人という小さな学校が今、町の大きな力となっています。

2013年春、中村さんはこの津和野高校にやってきました。肩書きは、津和野高校魅力化コーディネーター。当時の生徒数は155人で、統廃合の危機に見舞われていました。人口約8,000人の津和野町にとって、津和野高校の生徒数は人口の約2%に匹敵。この町で一つの高校がなくなるということは、町の未来もなくなるということを意味していました。中村さんのミッションは、高校の生徒数を増やすこと。そして、魅力ある高校づくりを通して、魅力ある人づくり、地域づくりを目指すというものでした。



見失ったものを探しに

中村さんは元小・中学校の教員。リスク管理に必死な学校現場に触れ、子どものための教育ではなく、大人のための教育環境ではないかと疑問を持ちます。「教員として何をすればいいのか。子どもに何を伝えればいいのか」。その答えを見つけるため、教員を辞め、28歳で協力隊に参加しました。

赴任したのはマダガスカル教員養成校。小学校を無償化して生徒が急激に増加。教員不足を補うための非正規教員への指導に当たりました。「全く成果を残せなかった」と言う中村さん。「授業は現場で教員と生徒が一緒につくっていくもの。ですが言葉の壁によって、一方的に伝える授業しかできなかった。自分が一番伝えたかった生徒と教師の双方向の授業を自分が実践できていなかったんで



マダガスカルでの授業風景

す」。活動の中で、課題解決を行うためには人間関係をつくった上で、関係の質を高めることが解決の糸口であるということを実感。しかし「仕事上の関係づくりがなかなかうまく進まなかった。最後まで突破口が見つからなかった」と振り返ります。

一方で、得たこともたくさんありました。「アフリカでは教育を受けることで人生が豊かになります。教育と人生が直結していました。また、多くの人が家族や友人を幸せにしたいと誰かを豊かにするために学んでいます。教育の目的が見つかり、実生活と結びついた学びの必要性をしみじみと感じました」。帰国後は「日本の教育を社会と結びつけたい」と友人の会社で働きながら教育イベントなどを企画する日々を送ります。

大切な人との出会いが未来を拓く力に

マダガスカルでの多くの失敗は、島根で生かされることになります。知人の紹介で津和野高校にやってきた中村さんが取り組んだのは、まず、地域の中の魅力的な人や課題に立ち向かっている人と生徒を引き合わせるキャリア教育。そして実社会の地域の課題をテーマに、地域の人と地域の課題解決に取り組む「地域系の部活動」を開始しました。学校と地域が一緒になって魅力化を進める協働体制を整え、生徒の力を引き出し伸ばしていく教育環境が全国から注目を集めるように。生徒数は現在200人、関東や関西からも多くの生徒が入学しています。

「人口減少にひもづく地方の課題は、中長期的には結局“教育”でしか解決できないと思っています。受験か部活かの高校教育は都市への人口排出機関だったけど、大切な人との出会いや課題の解決の仕方を学ぶ高校教育は、この小さな町の未来を必ず切り拓いてくれるはず！」と弾ける笑顔で語ります。



津和野高校で授業をする中村さん

中村さんは
こんな人！

島根県立津和野高等学校
教頭
宮島 忠史さん



津和野高校にとって、中村さんはマダガスカルの神木“バオバブ”のような存在です。遊び場であり、村の長老から教えを聞く場所であり、実利面でも人間と共生してきた木と聞いています。中村さんの地道だけれどしっかりとしたビジョンにそった活動が周囲の共感を呼び、形となり、自ら動き始める生徒も現れました。中村さんは将来、バオバブのような存在として振り返られる人だと思っています。

海外から島へ、島から世界へ 地域の未来をつくりたい



No.02

西ノ島町役場 地域振興課
観光商工係

中上 麻里子さん

なか がみ ま り こ

神奈川県出身。大学では国際協力・開発経済学を専攻。国連機関、外務省やNGOなどを通じてボランティア活動に携わる。世界シェア約60%、国内シェア約70%を誇る機械要素部品メーカーに入社し、販売促進、宣伝広告の業務を担当。入社5年目、興味のあった協力隊に応募。2008年から青少年活動でペルーへ。帰国後は復職し南米エリアの営業を担当。結婚を機に島根県西ノ島町に移住、現職。

▼派遣国



ペルー

▼配属先

エンマヌエル児童養護施設

▼職種

青少年活動

▼活動内容

養護施設で子どもたちとともに生活し、よき相談相手となり、自立していけるように助言、指導する。

▼派遣期間 2008年3月～2010年3月

東京から1ターンで西ノ島へ

島根半島の沖合に浮かぶ、大小180以上もの島からなる隠岐諸島。その中の一つ、西ノ島は世界に誇るカルデラの島。地球を感じることができるダイナミックな風景をいたるところで楽しめます。中上さんはこの美しい島の西ノ島町役場で、観光振興の仕事に携わっています。

大学では国際開発経済学を学び、卒業後は東京都を拠点としてグローバルに事業展開をする機械要素部品メーカーに就職。協力隊から帰国後は復職しましたが、結婚を機に最寄りの港から高速船でも2時間はかかる西ノ島に。「東京からよく来たねと言われるのですが、協力隊の経験によって環境が変わることが怖くなくなりました」と軽やかに笑います。



やる気が空回りして落ち込む日々

就職して仕事へのやり甲斐を感じながらも、「国際協力に携わりたい!」との思いが消えることはなかったそう。入社5年目、退職を決意して協力隊に参加することを上司に伝えたところ、社会貢献につながる協力隊事業に理解を示した会社が「ボランティア休業制度」を制定。会社の応援を受けてペルーに向かいました。

派遣先は首都リマ郊外にある児童養護施設。家族と一緒に暮らすことができない2歳から19歳までの40人ほどと、寝食をともにしながら学習や生活の支援を行いました。意欲満々でペルーを訪れた中上さんですが、不慣れな言語で誤解が生まれ、嘘や約束を守らないなど理不尽な状況に直面して悔しい思いをしたことも。「自分の思いが空回りしているような気がして、日本に帰ろうと考えたこともありました」。そんな活動を通じて学んだのが、周りを見て、相手の事情をくんで仕事を進める大切さ。相手を尊重して反応を待つようにすると、少しずつ向こうから声をかけてくれるようになりました。

心の支えは施設の子どもたち。「私が落ち込んでいると抱きしめて励ましてくれました」。子どもたちとは朝から寝るまで一緒。日本語を話す機会はほとんどなく、スペイン語を予想以上に早く習得できたそうです。

西ノ島にきて1年、そろそろ行動開始

「計画通りに進まないことは当たり前。起こったことにイライラするよりも、そうならないようにどうするかを考え、先手を打って行動するようになりました」。協力隊をはじめ海外での経験によって、フットワークをさらに軽くした中上さん。そして、ペルーでやる気が空回りした失敗を踏まえて、「西ノ島では1年くらいは大人しくしていようと思って」と、島の空気を感じることに、島の人を知ることが優先してきました。

勤め始めてもうすぐ1年、そろそろ行動開始です。「西ノ島の美しい自然は、国内外からの注目を集めています。この観光資源を活用して島の活性化を図るために、観光客の受け皿を整えていきたい。飲食店や宿泊施設の整備や、情報発信の多言語化に取り組む予定です」。島の魅力を世界へ伝え、地域の未来を広げようと動き始めています。



中上さんは
こんな人!

西ノ島町役場 地域振興課
観光商工係
係長

三島 秀威さん



中上さんは自分で考えて行動に移せる人です。企画力があり、毎年恒例のイベントでも「今年は少し変えてみよう」と提案してくれます。隠岐諸島では今、外国人観光客が増えています。国外での経験が豊富で、外国人との交渉なども英語やスペイン語を使って堂々と対応してくれ、とても頼もしいですね。彼女のスキルと個性を生かして、ますます活躍してほしいです。

空間と時間の共有で心が通じる柔軟性をもち生徒と関わりたい



No.03

邑南町立瑞穂中学校
教諭

天津 貴志さん

あ ま つ た か し

島根県出身。中学生の時、外国語指導助手（ALT）として勤務する外国人らが開くイベントに参加したことから、海外に興味をもつように。大阪の外国語大学（専攻はフィリピン語）に進学。4年次に休学し、NGO活動で半年ほどフィリピンへ。大学院1年次に協力隊OB・OGの話を聞いて協力隊へ応募し、2年次に休学しブルキナファソへ。帰国後は地元の島根県で教員採用試験を受け、現職。

▼派遣国



ブルキナファソ

▼配属先

環境・生活環境省中央部 地方環境・生活環境局

▼職種

村落開発普及員

▼活動内容

公営苗場で、植林苗畑と研修センターの活動を支援する。地方の隊員と連携し、地域の自然・社会環境に応じた植林とその普及方法を調査、植林セミナーを開催する。

▼派遣期間 2003年7月～2005年7月

生徒に寄り添える教師として

「協力隊の経験で一番思い出に残っているのは、村の人たちや子どもたちとのふれ合いや活動ですね」と天津さん。帰国後は大学院に戻り、夢であった教員採用試験を受験。一度は失敗するものの講師を経て、翌年、見事採用試験に合格。「教師として、人として大切にしているのは、これまでの自身の海外での経験などを踏まえ、“いろいろな価値観がある”ということを確認すること。柔軟性をもって生徒に接していきたいと思っています」。異国の地で言葉も分からない中でも、現地の人と一緒に時間を過ごすことで、やがて心が通じることができたという経験から「“空間と時間を共有する”という言葉をよく生徒に言っています。ともに過ごすことで心が通い合うきっかけができると考えています」。英語の授業を通じて知識を教えることはもちろん、生徒に寄り添うことのできる教師として、もっとこれからも生徒に関わっていきたいのだとか。「海外での経験を話すことで、生徒たちが海外に興味を持つとともに、コミュニケーションの一つのツールとして英語（語学）にも興味をもってくれるとうれしい」

現在、島根県の協力隊経験者が参加する島根県青年海外協力協会の会長を務める天津さん。県内での国際理解活動にも力を入れたいと考えています。



人の温かさを感じた協力隊活動

「協力隊に行ったのは学生のころ。できることも限られています。自分にできることはないかと考えたときに、ブルキナファソの活動内容を見て“これならできる”と応募しました」。現地では、実際に村の人たちと種や苗を植え、水をやり雑草を抜き、植林センターの職員を小学校や村のグループ等へ派遣するコーディネーターなどを行っていました。「現地の人たちは、僕のことをすぐに受け入れてくれました。村人同志が“精が出ますね”という意味のあいさつをする姿に温かさを感じました」。そんな人とのつながりを大切にするブルキナファソで過ごしたことから、帰国後の生活場所として、会話を楽しめ、密な関係性がとれる商店街のそばを選んだのだとか。「ブルキナファソで現地の人たちの役に立ったとは言えませんが、村を離れるとき、別れを知っている現地の子どもたちがわざと“また明日ね”と言ってくれたことがとても思い出に残っています」と笑みを浮かべます。



（上）村の女性と子どもたち
（左）ブルキナファソにて植苗の様子

生徒のために経験を生かしたい

現在、授業が楽しくて、あっという間に時間が過ぎてしまったと生徒に感じてもらえるよう授業内容を日々模索中。「生徒がイキイキとした表情をみせてくれる授業を目指したいですね」と天津さんは言います。「言葉も通じない海外での経験があるからこそ、少々苦難や困難にもドーンと構えていられるのかもしれない」と笑顔で締めくくってくれました。



天津さんが担当する授業の様子

天津さんは
こんな人！

邑南町立瑞穂中学校
教諭

三宅 誠幸さん



高校の同級生で、教員採用も同期。現在同じ中学校で教べんを執っていることもあり、天津さんとは縁があるんだなとうれしく思っています。いろんなことを熱心にするので体を壊すのではないかと心配して、一度本人に聞くと「子どもが喜ぶことなので頑張ることができる」と言ったことが印象に残っています。また学校全体の企画を考え行動し、折衝役などを積極的に担う様は、協力隊の経験があるからではないでしょうか。



患者さんに寄り添い、心の通う信頼される助産師に

No.04

江田クリニック産婦人科
助産師

岩永 夏美さん

いわ なが なつ み

鳥根県出身。鳥取大学医学部保健学科看護学専攻助産コースを卒業。大学在学時にワーキングホリデーや、インドの高齢者施設でのボランティア活動などを経験。「もっと専門的な知識をいかして海外で活躍したい」と助産師としてのスキルを磨き、協力隊へ。帰国後は地元へ戻り、現クリニックへ。JICAが行う出前講座で講師等も務める。

▼派遣国



グアテマラ

▼配属先

サンカルロスシハ保健所

▼職種

助産師

▼活動内容

JICA技術協力プロジェクトなどで伝えられた技術をふまえ、幼児死亡率の高い同地域の保健所で開催される妊産婦教室、集落を訪問する巡回指導で保健指導・健康教育を支援する。

▼派遣期間

2012年6月～2014年6月

地元でも協力隊の経験が生かせる

協力隊から帰国後は、「地元に戻ろうか、進学してさらに勉強を積むか」と、半年ほど進路について迷っていたという岩永さん。そんな中、地元へ帰ってJICAが行う出前講座で何度か講師をするうちに「地元で居ながら経験が生かせる」ということに気づいたそう。「地元の産婦人科クリニックで助産師として勤める上では、直接、協力隊の経験が生かせるということはありません。しいていえば何事にも“どん”と構えていられるようになったことでしょうか」。この出雲の地域にはブラジル系の方が多く、海外の方が患者さんとして来院されることも。「挨拶程度ですが、妊婦さんの不安を取り除き、寄り添うために英語やスペイン語だけでなく、ポルトガル語にもチャレンジしています」。さらに年に数回、出前講座や看護系大学での講義を通じて、これまでの経験を後輩たちに伝えています。



(上)妊婦への「妊婦体操」指導
(左)生まれたばかりの赤ちゃん

助産師のキャリアを積み、協力隊へ

中学生のころ、「海外への憧れを抱く中、とくに何か役に立てることがしたい」と考えていたという岩永さん。そんなとき図書館で目にしたのが『青年海外協力隊になるには』という本。協力隊は2年という限られた期間での活動であることから「“青年海外協力隊を目指さないようにしましょう。青年海外協力隊を人生の目的に選んではいけない”と書いてあり、衝撃を受けました」。その本で看護職が海外でも需要があるということ、さらに叔母が助産師だったこともあり、将来を見据え、助産師資格を目指すことに。大学卒業後は「最低5年は助産師としての専門スキルを磨いてから、協力隊へ」とキャリアプランを定め、総合病院や助産院で従事し、協力隊へ応募しました。「家族や職場の人、周りの人に応援してもらって協力隊へ行くことができたことに、今でも感謝しています。協力隊での活動中、グアテマラまで両親と叔母が私の仕事ぶりを見に来てくれて、“一人前に仕事をしている”と喜んでくれました」

後悔するくらいなら、まずチャレンジを

「現地では最初、何時に出動したらよいか分からないほどでしたが、ホームステイ先の同僚に助けられました」という岩永さん。ほこりがそのまま放置されていたり、カルテなどの整理整頓ができていなかったりと困惑することも数々。機材・機器があっても使える人が少なく、故障すると簡単に修理できないこともあって放置されていたそう。「超音波(エコー)の機器を検査で積極的に使ってもらうようサポートしました。実際にお腹の中で動いている赤ちゃんの様子をお母さんに見てもらうことができました」とうれしそうに振り返ります。一方で反省点もあるそうで、半年後に保健所を再び訪問すると、任されていた母親学級が閉鎖されていたそう。「協力隊として、私が運営などを任されていたことで、逆に現地の方の仕事を奪ってしまったのではないかと思います」と現在でも交流を続けるからこそその意見です。

それでも、岩永さんが声を大にして言いたいのは「迷うならやろう。やらずに後悔するなら、やってみよう」ということ。自身がチャレンジする姿を通してそれを伝えています。



地元の小学校で「出前講座」

岩永さんは
こんな人!

鳥取看護大学
学部長・教授
前田 隆子さん

岩永さんには鳥取看護大学や鳥取大学医学部の学生たちに、年に数回ほど講義をしてもらっています。協力隊の経験をふまえ、熱心に語ってくれています。学生たちは海外での医療現場の様子を実際に聞くことができ、国際医療の必要性のほか、海外や協力隊に興味をもったようです。今後も学生たちに話をしてもらいたいですし、彼女には将来世界へ羽ばたいてほしいと思っています。



世界を変えてきたのはいつの時代も、たったひとりの強い想いだ

青年海外協力隊は現地の人びとと同じ言葉を話し、

ともに生活・協働しながら開発途上国の国づくりのために活動しています。

1965年に開始され、これまでに91か国に44,000名以上を派遣しました。

JICA中国

〒739-0046 東広島市鏡山3-3-1

TEL:082-421-6300(代表)

FAX:082-420-8082

URL: <https://www.jica.go.jp/chugoku/>

JICA海外協力隊

Q 検索

独立行政法人 国際協力機構 中国センター